

メディア・リテラシーを育む社会科学習

ー第5学年「ケイタイ・プロジェクト」の実践からー

須 本 良 夫

1 はじめに

20世紀末から、コンピュータの進歩は著しく、これまでいわれていたP C (Personal Computer) という言葉も、インターネットやハードの進歩によりパーソナルな部分が少なくなってきたといわれている。情報に関する部分だけのこととはいえ、社会の中で個(パーソナル)が消えかけているということは、社会科の目標である公民的な資質の育成にとって大きくかかわってくる。

今、社会では人間関係が希薄になり、機械の進歩で情報だけのつながりになってしまっていることは多い。情報のやりとりだけでなく、社会の中にはこれまでになかった国際化、少子高齢化、環境の悪化など様々な新たな課題が生まれてきている。そうした中で、新たな課題に対して主体的に取り組むべき個の育成こそ、これからの公民的な資質を考えるうえで重要である。そのためには情報を活用し人と人とがかかわり合いをもって、新たな知恵を生み出して問題に対処していくという姿がなければいけないだろう。

情報に左右されないためにも、メディア・リテラシー育成はこれからの社会科において、育成していかなければならない大きな要素といえる。

2 メディア・リテラシー教育

mediaは日本語で記す場合、一般的にはカタカナで表記されることが多い。そのメディアがさすのは大きく分けて、

- コンピュータを中心としている通信機器全般。
- 音声、動画、静止画などの情報を伝える手段。
- 情報を伝える媒体。

と、というようなものが考えられる。

また、リテラシーについては、基本的には読み書きの能力のことであるが、研究者と対象によって微妙な概念の違いがある。しかし、この2つの言葉を合わせメディア・リテラシーとなると、大きな共通項は出来上がる。

本稿では、これまでの研究の捉えを合わせ、次の3点でメディア・リテラシーという言葉进行を定義する。

①メディアを操作する

多様なメディアを理解し、子ども達がメディアを利用できるようにする。

②メディアから出る情報に対しての批判的読解能力をもつ

メディアから送られてくる様々な情報を鵜呑みにして、全てを信じることなく、情報を批判的に読み解いていくことができるようにする。

③メディアを用いて作り出す

多様なメディアを用いて、新たなメディアを作り、発信していくことができるようにする。

インターネットの普及により、情報のグローバル化が進んで、子ども達が調べた情報は、教師のもつものと遜色がなってきた。そのため社会科の調べ学習においても、子ども達が調べたつもりになって、情報を批判的に読んだり、情報と情報をつなぎ合わせるということをしなないでいる姿を見かける。

社会科の授業で情報の有効な活用を扱う単元では、情報産業の今を扱うというだけでなく、幅広くメディア・リテラシーについて考え、どのようなことをどう扱うべきかを位置付けておくことが必要である。

3 指導の実際

(1) 単元と子どもの実態について

携帯電話・ファックス・パソコンなどの新しいメディアが、著しい速さで影響を及ぼしている現在の社会は、情報化社会を通り越し、高度情報社会とよばれるまでになった。その結果、人間ひとりの受け入れ得る情報量を、供給される情報量がはるかに上回る状況になりつつある。そうした中、子どもたちの生活の中で、電信電話は情報収集のツールとして欠かせないものとなっている。10年前であれば電信電話といえば、電話とファックスがほとんどであった。しかしこの数年、通信技術は急激な変化を遂げた。一つはインターネットの普及であり、もう一つは携帯電話である。前者は電話回線を利用し、情報をこれまでのそれとは比べ物にならないぐらいまで、人々に与えることになった。また、後者は、いつでもどこでも電話がかけられるということにとどまらず、インターネットと同等の情報をリアルタイムで人々に配信している。しかもその利用は、年々低年齢化の様相が進んでいる。

授業を実施する前の段階で、子ども達の携帯電話の所持率は、39人中13名と学級の1/3である。おもな使用理由は、習い事の帰りに家に連絡を入れる。外出の際、家族との連絡に使う。友だちとの連絡の取り合いに使う。というものであった。

子どもにとって、使用しての長所は、そのほとんどが即時性であった。使用している子どもにとっては、既に携帯電話は手軽なツールとして認知されていることが伺える。携帯電話で使用頻度の高いものは、メール（写真）・ゲームといったものであった。

また、所持していない子どもも、全員が一度は使用したことはあった。そして、そのうち75%の子どもが、すぐにでも携帯電話を購入したいと思っていた。その購入希望の理由は、メールとゲームを行いたいし、もっといろいろなことをしてみたいということであった。しかし、家族が必要がないからと購入してもらえないということだった。

まだ小学生には早いという保護者の割合が上回っているものの、携帯電話というメディアは間違いなく世間で認知され、子どもの中にも、それは大人だけが使うものという意識は既になくなってきている。また、携帯電話に関してはメールやゲーム・スケジュール管理などこれまでの電話機とは異なり、コンピュータを内蔵した情報端末としての色合いの方の意識が強いといえる。

しかし、この急激な進歩に、情報に対して人々はどのように受け止めるか、携帯電話リテラシーが十分に備わらないまま活用をしているのが現状である。そこで、これからの電信電話の主役であろう携帯電話を通して、メディアリテラシーを考えることは重要なことであり、これからの情報についての利用を考えるのに大切であると考えた。

(2) 指導計画と研究仮説

①指導目標

- ・情報の受け方や発信の方法について、自分なりに意見をもつことができようにする。
- ・電話の利用に関して、聞き取り調査など調べ学習を行い、調べたことをもとに表現することができるようにする。
- ・携帯電話など電信電話の様々な現状を理解することができるようにする。

②指導計画 (全10時間)

第一次 電信電話についての興味や疑問をもつ 1時間

- ・電話ってどうなっているんだろう
- ・携帯で情報が必要な

第二次 電話の秘密を探ろう (電話～携帯電話へ) 5時間

- ・電話の歴史は ・電話の必要性 ・何が電話でできるのか
- ・家の人の利用の仕方を聞こう

第三次 子どもに携帯は必要か? 4時間

- ・変わってきた情報通信 ・情報の危うさ ・これからの電信電話はどうなる

③研究仮説について

子どもは、日ごろからテレビのニュースや芸能情報など多くの情報と接している。しかし情報ということに関しては、意識することなく目や耳などの五感を使い、入ってくる情報を無意識に処理している。今日のように情報が氾濫すればするほど、その処理能力は高いものを求められる。そのため、情報とは何かを考え、情報をいかに自分たちが活用していくかということをも携帯電話を通して考えることができるようにしたい。そこで以下のような仮説を設定した。

仮説	近未来の携帯電話の利用を想像し、情報をより身近で簡単に扱えるようになることを考える場を設定する。そうすれば、情報の長所・短所とともに携帯電話の活用について考え、自分はどのように情報を活用していくとよいかを考えるであろう。
----	--

本研究仮説は、送られてくる情報を批判的に読み解く力を伸ばすためには、どういった授業設計をするとよいかということ考えた研究仮説である。そのため、以下の指導の実際においても指導計画 第三次を中心に述べることにする。

(3) 指導の実際

①これまでの学習から近未来の電話を考える

第二次までは電話のハテナ解決ということで、電話の発展を考え、電話のつながる仕組みと産業活動の中での多様な活用について実際に見学などを行い考えた。

そして、第三次では、これまでの授業の流れをくみ、携帯電話のこれからの発展を考え、近未来(自分たちが20歳になったころ)に携帯電話はどのようなか考えた。子ども達は

- ・より小型化される ・立体映像が見られるようになる
- ・買い物ができるようになる ・兵器のようになる

等、様々なものが出てきた。

②情報は必要なのか、必要ではないのか

近未来では、自分たちにとって電話機は都合よく発展してくれるようになるだろうと考えていた。その意識の中には、ハードが便利になれば情報も得やすくなり、暮らしが向上するという意識がうかがえた。そこで子ども達に次の論題を提示した。

携帯電話から流れてくる情報は必要か? 必要でないのか?

子ども達は情報はあったほうがよいと答えた(39名中33名)。主なものは、次の通りである。

- 手軽である。
- 災害の時など、命が助かることがある。
- インターネットにつながるから、世界中の人とつながることができる。
- 必要な時にすぐに必要な情報があることは便利である。

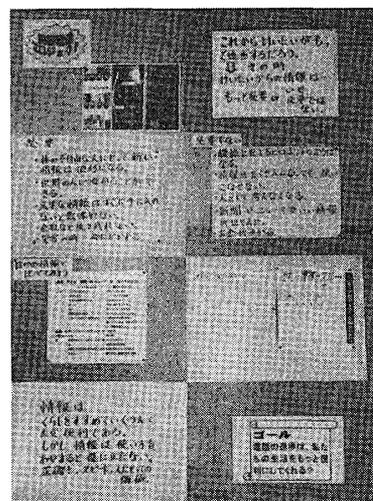
この仮の意思決定においては、日常の生活の中での携帯電話の経験をもとに考えていた。子どもたちの中にも「情報はあったほうがよい。」ということに対しては、当然のような反



応であった。しかし、「情報はあったほうがよい」という意見に対して、数人の子は自分の考えで反対を述べた。

- 機械に使われてはいけない。
- 自分でできることも情報がすぐに手に入れば、しなくなってしまう人がだめになる。

情報ということで子ども達に討論を進めるように論題を設定したつもりであった。しかし子ども達は、電話機の進歩とともに情報の活用を考え、情報はあったほうがよい・悪いということについても、論題からの意見にも幅がみられた。メディアリテラシーにおいては、情報を批判的に読むという捉えと、メディアそのものの利用について考えるという部分がある。そこで、情報と機器の進歩について分け、両面から捉えることができるように言葉をかけ進めた。



③本当に必要な情報とは

携帯のハードを進歩させてまで必要な情報ってあるのだろうか。子ども達は、機械が進歩するから、それに伴っていろいろな情報が増えるという一つの結論を導き出した。

その一例が、写真メールである。電話本来の機能でないものも利用者に価値があるから写真を情報として送るといふ。だから利用者に必要な機能が進歩すれば、情報の利用も質も、どんどん進化するというのである。それは、自分たちの生活だけでなく、海外の人と話をする際、もし携帯に翻訳機能がついていれば、素晴らしいと近未来を予測した。

また、体の不自由な人たちにとって、携帯電話は予想しないような使い方ができると考えた子がいた。目の不自由な人が外出をして買い物をするのにも、色やその製品を自分の欲しているものに合うかどうかを、テレビ電話だったらリアルタイムで携帯電話を使って知人に見てもらえることができるというのである。そうすると携帯電話を利用した情報があるということは、多くの人にとっていい面をもたらすという。

これには大方の子も賛成をした。しかし、犯罪の面や武器への発展を考える子ども達の意見を聞くと、また悩むことになる。つまり、携帯電話の機能面の発展は、それを利用する側がどのような情報を必要としているか次第で、犯罪にもつながるというのである。

また、人に知られたくない情報も流れるという。情報が不足して会社もつぶれることもあるかも知れないが、プライバシーが守られなくなるというのもいやだというのである。

これに対しては、それができないように止める技術も発展するという意見が出たが、それ以上の深まりは見られなかった。

そして考察に載せているような、最終的な意思決定場面を迎えた。仮の意思決定では情報はもっと必要であり、多いほうがよいということで意見がまとまりかけていたが、最終の意思決定では、情報は必要以上にいらぬという子が増えた。

しかし、意思決定後に子どもたちのほうから、情報については必要か必要でないかは、どちらにも決めにくいという声が多かった。未来はもっと機能が発展しそうだし、もし発展すれば今以上に使う人の価値でその人が必要ならお金を払っても必要だし、無料でもない情報には価値がないのでいらぬだろうというのである。そうした声から、機能とは別にきちんと伝えたり、伝わったりする情報はその個人がきちんと判断しなければいけないだろうということ意思決定とは別にまとめた。

4 考察

(1) 未来予測の場を設定したことについて

既に述べたように、子ども達にとって、携帯電話は日常の情報端末である。10年前に同

様の授業を行った際は、社会の中で携帯電話が一般化し始めた頃だった。そのため、この10年間の電話機とそれをとりまく環境の進歩は、電話に対する子ども達の意識も進歩させている。しかし、これからどのように変化するかということに関しては、あまり変わらず同様なものを考えていた。

自分たちが欲する情報は、ハード面の機能の発展によるところが大きく、子どもにとってそういった面も捉えきれないと、情報について考えていく条件が今の社会だけのものとなり、これからを考えにくいものとすると考えた。この単元を進める間も、駅の改札が携帯電話で通過できるとか、携帯電話の着信音に歌詞のついた音が流れるという機能を搭載するものまで出てきた。そして、その着信音の歌はヒットチャートの上位に上り、携帯電話がコマーシャル効果を生むという現象まで生まれ始めた。子ども達は、その様子を見ていて、歌は要らないだろうと言い、情報が新たなもの（産業）を生み出しているということを討論の際に言っていた。

そうした社会と子どもたちの様子を見ていて、経験だけを取り入れて討論に臨み意思決定をしていくよりも、より社会の現実の変化に目を向けるように教師が支援をしてやり、その社会の変化を個人で捉えなおして、最終的な意思決定ができるようにしていくといったことが変化の激しい社会事象を内容として取り扱う際には必要である。

変化の激しい社会だからこそ、機器の変化を実感し、これからの変化にも対応していき、機器に使われることのないような力も育成することはメディア・リテラシーの大きな一つである。

(2) 情報について批判的に読むということについて

子ども達は、指導の実際でも述べたが、仮の意思決定と最終の意思決定の段階では変化をした。情報が自分たちにとって、仮の意思決定の段階では、機械に使われていると人間はだめになるという理由が3人。しかし、討論がやりとりされることによって、その人数は2倍になった。そして、新たに情報について条件をつけ、正確でないものと、自分にとって価値の入らないものなら必要ないという情報への見方の変化が生まれてきた。

また、最終決定をした後、「どういったことに気をつけて情報のやり取りをしないといけないか」とたずねたところ、子ども達の観点は授業前と比べ、自分にとって単純に使いやすい、金額が安いというような都合が良いというだけにとどまらず、周囲への配慮や情報に惑わされないということをあげるようになった。また、少数ではあるが、情報を得るためのお金は、正しいものを早く得るためには必要だという意見も見られた。

以上のようなことから、子どもたちの中から情報とは何かを考え、批判的に読もうと姿を見ることはできた。しかし、本単元での論題の設定では、子どもの反応からもわかる通り、討論をし決定するには難しさもあったようであった。

5 おわりに

本単元では、電信電話を情報産業の一つとして取り上げた。もちろん、電信電話を通して学習するのは、電信電話の利用とともに、情報の有効な活用について考えることであった。携帯電話というこれからのメディアは、学習材として非常に内容を持ったものである。今後リテラシーを含めて整理をしていきたい。

【参考文献】

- ①鈴木敏江、「ケイタイプロジェクト」成果集、2002、未来教育プロジェクト
- ②水越敏行、『メディアリテラシーは多面的である』「国語教育」No.616、2002、明治図書
- ③藤川大祐「メディアリテラシー教育の実践事例集」、2000、10、学事出版
- ④トロント市教育委員会、「メディアリテラシー授業入門」、1998、学事出版
- ⑤水越敏行・佐伯胖「変わるメディアと教育のあり方」、ミネルヴァ書房